最高のプロポーズ

僕は今年で32歳
市役所に勤める夢みがちな公務員

僕には結婚して5年になる妻がいる

昔からの幼馴染で
名前は琴乃

まさかあの琴乃と結婚するなんて・・・

とっても美人で気遣いも出来て
どうして僕みたいな平凡な男と結婚してくれたんだろう？
たまにふと考える

大学時代から付き合い初めて
交際８年目の27歳の時婚約のプロポーズをした

その時の話しを少ししようと思う

遠慮

琴乃は普段自分から何かを望まなかった

デート中自分から何か欲しいとは絶対に言わない
交際記念日や誕生日でさえ
「欲しいものはない
一緒にいれれば良いの」

僕が平凡な公務員だから
気遣いの出来る琴乃だから
きっと僕に遠慮してるんだよね・・・

２人の関係

付き合って8年、出会って27年　笑
僕は琴乃といつも一緒で
常に支えてもらってばかりだったね

大学４年の時
公務員試験に落ちて就職先もなかった僕
そんな僕を養ってくれたのは
先に就職の決まった琴乃だったね

公務員になってからも
食事や洗濯などの家事をやってくれるのは全部琴乃

そんな琴乃はいつも
「いいよ」って笑ってたけど

僕は琴乃に何にもしてあげられない自分を
いつも情けなく思っていたんだ

望まない

何も望まない琴乃
優しい琴乃

僕はそんな琴乃に甘えてたんだな

なにもしてやれなかった僕

毎年琴乃の誕生日は
安いレストランで食事をして
プレゼントも特別なものをあげられなくて・・・
幼馴染のノリでごまかして

「お金じゃないから」
そうは言っていたけど

本当に琴乃が欲しいものって何？
長く一緒にいるはずなのに
いつもそれがわからなかった

喜ばせたい

琴乃を喜ばせたい

琴乃の28歳の誕生日は1ヶ月後に迫っていた
今年こそ・・・

僕は高校・大学の親友で
琴乃の元カレでもある孝介に電話をした

琴乃の欲しいものを知りたくて
ただそれだけの理由で

衝撃

「琴乃何か僕について言ってなかった？」

俺ら２人のことを良く知っている孝介だから
何か教えてくれる気がしてた

「この前琴乃と食事した時
そろそろ結婚したいみたいなこと言ってたよ」

それは僕が気づかなかった琴乃だった

「男になる時かもな？」

普段何も望まない琴乃だから
本当に望んでいるものが僕には痛すぎるほどわかった

決意

本当の琴乃の気持ちを知ることが出来てよかった

僕はこの時琴乃に婚約のプロポーズをすることを決意した

世話になりっぱなし、我慢させっぱなしだった
いつも気を遣わせてしまっていた

だから僕が琴乃に出来る最高のプロポーズをしてあげたい

僕のプロポーズ計画が始まった

夢みがち

豪華客船に誘って
綺麗な夜景を背にワインを口にしながら
そっとジャケットから箱を出す
「結婚しよう」

っておい

そもそも豪華客船ってチケットいくらかかるか知ってるのか？
ワインなんて普段高くて買えないだろ？

平凡な公務員の僕には到底不可能な方法が
頭の中で浮かんでは消えていった
どうしよう

出来ること

僕に出来ること・・・

琴乃が喜ぶこと・・・

試行錯誤する日々

僕って
①月収25万・年収300万
②趣味はクイズ番組を見ること
③友達は多いほうじゃない

だから豪華なプレゼントや演出をすることも出来ないし
友達を集めてサプライズパーティやサプライズビデオ制作なんか出来やしない

それに琴乃は
他人に気を遣ってしまう女性だ
豪華なサプライズをしたら絶対僕の懐を心配して喜びを半減させてしまうかもしれない

僕は考えた
琴乃を喜ばせる方法を

よし！

普段通りのデートをして
飾らない言葉でプロポーズ

でも普通にプロポーズして喜んでもらえるかな？

だから僕はなるべくプロポーズする雰囲気を出さずに
一瞬で空気を変えるような演出をしようと考えた
決して豪華ではないけど、確実に琴乃の心を動かすな

決戦前夜

そして具体的に計画を練り始めた

なるべく普通の日
記念日以外のほうが普段通り感が出るだろう

だから僕はかすみの誕生日ちょうど１週間前に告白することを決めた
かすみの誕生日は11月14日
そして今日が11月6日

つまり明日だ　笑
僕の心は固まった

いつも通り？

デートの誘いはいつもの通り
前日の夜メールで

集合場所・時間もいつもの通り
渋谷に１９時

でも当日の僕は全然いつも通りではなかった
心臓はばくばく
いつも以上に見た目を気にする

仕事もなかなか手につかず・・・

込めた思い

仕事終わり
会社前のジュエリーショップで婚約指輪を
駅前の花屋さんで赤いチューリップを買い
急いで渋谷に向かう

どうして赤いチューリップかって？
後でわかるよ

電車の窓で髪型をチェックなんかしたりしながら
20分揺られて渋谷へ

街合わせ場所にきっちり１０分前に集合
そこらへんは我ながらさすが公務員　笑

いつも通り

琴乃がやって来た

いつも通り適当に店を決める

店に入ってメニューを見て
彼女が先に決めて僕が２人分まとめて頼む
これもいつも通り

僕はいつも通りを心がけた
自分から何も望まなっかた優しい琴乃に
最高の瞬間を届けたくて

勝負の時

デザートも食べ終わって
そろそろ店を出る時間の頃

僕は切り出した
「花言葉クイズ！　この花の花言葉なーんだ？」
クイズ好きの僕はそっと赤いチューリップを取り出す

「えーわかんないよ」
急に花が出てきたことに驚きながらも
いつも通りの僕のクイズに
琴乃は優しく笑った

そして僕はスーツの手を伸ばした

結婚しよう

「正解は永遠の愛」

そっと花に指輪の箱を添える

２人の時間が止まった
琴乃は予想外の出来事に今にも泣きそう

「結婚しよ」
その言葉は思ったよりすんなり言うことが出来た

泣きながら頷く琴乃の手に指輪をはめ
そっと赤いチューリップの花を手に添えた

最高のプロポーズ

僕に出来るプロポーズ

相手に気を遣わせず
素直に伝えたい言葉を

決して派手じゃないし
特別なサプライズはないけれど

普段通りの瞬間に一瞬非日常の瞬間を

本当に欲しい言葉を欲しい時に言ってあげる

平凡かもしれないけれど

これが僕の最高のプロポーズ

さいごに・・・

今でも僕と琴乃は幸せに暮らしている

「お母さんごはん！」

娘のどたばたで始まる朝は
赤いチューリップが顔を覗かせるリビングで・・・

琴乃
結婚してくれてありがとう！